

二〇一五年七月一七日

苔庭を褥に沙羅の花白し
一カへついと消えたる夏衣
まなかいに阿蘇の五岳のしたたれり

ともえ
菜々
豆狸

二〇一五年七月一六日

序破急と噴水の穂の力増す
三川の落ち合ふところ風涼し
聞き耳をたてて台風過ぐを待つ
何処までも青田の続く米どころ
白桃の皮はするりと剥けにけり
み吉野の神の滝てふしぶき浴ぶ

宏虎
明日香
よう子
三刀
よし女
明日香

二〇一五年七月一五日

ドーナツの穴から覗く雲の峰
だんだんと寡黙となりし登山かな
遊舟の曲がりて景色一変す
人住まぬ竪穴住居黴にほふ
潮騒を枕としたる昼寝かな

よし女
豆狸
宏虎
菜々
泰山

二〇一五年七月一四日

樹下涼しわらべ地蔵の笑ひをり
梅雨最中素人寄席の混みにけり
夕焼けに染まる運河の波頭
光秀のお手植えといふ樹下涼し

ぼんこ
なつき
さつき
せいじ

二〇一五年七月二三日

早朝の路地に蚊遣の匂ひけり
鬼百合の傾ぎて塞ぐ深山道

さつき
せいじ

二〇一五年七月二二日

暦日を刻む三門青葉梅雨
朝まだきよりうなりあぐ草刈り機
ブロンズの少女の指に糸とんぼ
写仏終へふるまはれたる冷素麺
包丁の切れ味如何に新南瓜
打水をして艶めきし石畳

はく子
明日香
豆狸
ひかり
三刀
せいじ

二〇一五年七月二一日

切り株をベンチとしたる夏木立
川風の意にそひてとぶ糸とんぼ
犇めける蓮に風無き亭午かな
写仏する幽き筆の音涼し

こすもす
豆狸
ひかり
ひかり

毎日句会みのる選・二〇一五年七月一九日